

# 紙芝居で広がる世界

## 普及の支援から発展

子どもからお年寄りまでみんなが楽しめる紙芝居は、外国でも静かな人気を集め、この夏、日本とベトナムの紙芝居関係者の交流会が開かれた。国内でも、紙芝居を文化的に再評価しようという動きが盛んになってきた。

### ベトナムとの交流会も

東京・吉祥寺で7月、ベトナムとの紙芝居の交流会が開かれた。ベトナム紙芝居協会会長で画家のグエン・タイン・ダムさんが自作品の「2つのたまご」を演じると大きな拍手と笑いが起きた。アヒルとニワトリの手が競争しながら互いに助け合うことの大切さを知る物語だ。「言葉は違っても、気持ちを通じ合える」と翻訳家

の野坂悦子さんはいう。ベトナムに紙芝居が紹介されたのは91年。98年には国立児童出版社のキムドン社から独自の作品が出版されるようになり、戦争で帰らない父を描いた「象牙の櫛」など約100点の作品が生まれ、「KAMISHIBI BANI」の歌も生まれた。「全土に普及し、山村などで教材として活用されている」とキムドン社副社長の

「この場面はもっとゆっくりに演じたら」「演じ手の顔も見えた方がい」と、年々何回か開かれる「紙芝居文化の会」の研究会では、北海道から沖縄まで全国から集まった参加者から

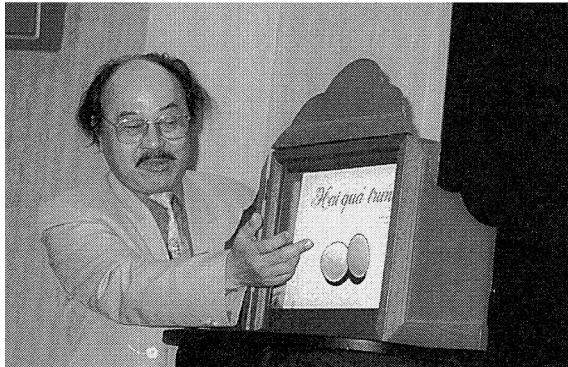
### 「共感する力」に期待

活発に意見が出る。家庭文庫で子供たちに聞かせているが、自分のやり方ではないのだろうか。ほの人はどんな工夫をしているのだろうか。さまざま悩みにについて、情報交換す

「紙芝居は、抜く、差す、という動作を通じ、作品の世界が広がる。演じ手と聞き手が向かい合い、コミュニケーションをとりながら感動を共有できる。「大人も子供も共感することや心を伝えることが苦手になってきている。紙芝居の持つ力に期待したい」と事務局の松井エイコさんはいう。

できる紙芝居は持ち望んでいたものだった。ベトナムの紙芝居には平和の願いがこめられている」と話す。交流会を主催した「日本・ベトナム紙芝居交流センター」は「普及を支援する会」から「交流の会」をへて、今年6月、発足した。「紙芝居がベトナムで大きく育ち、今、私たちが学ぶことがたくさんある」と、翻訳出版などを続けてきた酒井京子・童心社社長はいう。

同会は紙芝居の奥深さをもっと探ろうと、作家や編集者、教師、書店の担当者らが集まり、01年になってきた。会員は約400人。代表を務める作家のまついのひこさんは「紙芝居はともすれば下級なものとみなされてきたが、本当は世界に誇れる文化」と話す。全国各地で出前講座を開いたり、フランスやイタリヤなど海外を視察したり、様々な活動をしている。



●表情たっぷりな紙芝居を演じるグエン・タイン・ダムさん(東京・吉祥寺で)ベトナムの紙芝居「象牙の櫛」は日本語にも訳されている

新聞で紹介された  
紙芝居文化の会の活動